

令和7年度 第2回不登校児童生徒等の学びの継続支援に関する懇談会 要旨

1 日 時 10月15日(水) 13:00~15:00

2 開催形式 Web会議サービスZoomによるオンライン開催(ホスト会場:長野県庁西庁舎112会議室)

3 出席者

荒井座長、近藤委員、酒井委員、小松委員、村上委員、高坂委員、田中委員、甘利委員、成澤委員

4 内容

(1)開会

あいさつ(長野県教育委員会事務局 教育次長 清水 篤)

(2)事業報告

- ・校内教育支援センター等児童生徒の居場所づくりの工夫(心の支援課)
- ・信州型フリースクール認証制度等の取組状況の報告(次世代サポート課)
- ・不登校支援機関連推進員の紹介

(3)意見交換(進行:荒井座長)

- ・校内教育支援センターの仕組み強化、機能拡充のために必要になること
- ・子どもを中心とした連携の仕組みづくりについて考えていきたいこと

(4)閉会

あいさつ(県民文化部こども若者局長 酒井 和幸)

【協議の要旨】

○荒井座長

大きく分けて、以下の3点について、心の支援課と次世代サポート課からの報告がありました。

- ・校内教育支援センターの状況説明
- ・フリースクール認証制度の説明
- ・不登校支援連携推進員の紹介

これらの内容について、順を追って皆様からご質問を承ります。また、後の意見交換では、校内教育支援センターの量的拡充や質的向上、今後の展開の可能性、さらに学校とフリースクールの関係性をどのような視点で深めていくことができるのかについて、幅広くご意見をいただきます。まず、「校内教育支援センター」について、田中先生および高坂先生にご所感を伺います。先生方、いかがでしょうか。

○田中委員

昨年度より箕輪中部小学校内に教育支援センターを設置し、今年度で2年目となります。今年度からは「子と親相談員」を新たに配置し、運営を進めています。6月の懇談会では試行錯誤の段階であることを報告しましたが、本日は現状を共有します。

本校では、センターを利用する児童の多くが低学年で、学習支援に至る前段階として環境面での支援が中心です。特に「心が落ち着く場所」「話を聞いてもらえる場所」としての利用が多く見られます。6月には保護者から「学習支援にも取り組んでほしい」との要望があり、机を設置して学習スペースを整備しました。しかし、児童が学習に向かう意識を持つことは容易ではなく、課題が残っています。

相談員もこの点を課題と認識しており、教員免許を持たないことによる難しさを感じています。そこで、簡単なプリントや特別支援学級の先生の協力、習字や図工などの活動を取り入れ、学びへの意

識を少しずつ育てています。中学年は学習意欲が高い傾向がありますが、低学年では依然として難しさがあります。センターの設置場所も改善しました。昨年度は校舎中央の2階でしたが、今年度は出入りのしやすさを考慮し、玄関を通らずアクセスできる校舎端に移設しました。これは効果的で、来年度以降も工夫を続けます。

センターは一時的な居場所として位置づけ、徐々に教室復帰につなげています。6月以降、1名がセンターを卒業し、9月から教室に戻りました。復帰までには総合学習や給食への参加、友人関係の構築など段階的な支援を行いました。昨年度も1名が復帰しており、センターの意義を改めて実感しています。校外の中間教室やフリースクールとは異なり、学校内で居場所を提供できることは児童にとって非常に意味があります。

再来週には音楽会があります。授業に参加できない児童も、廊下で鑑賞したりセンターで練習するなど、本番参加に向けた支援を行っています。支援員の調整や欠勤時の対応など課題はありますが、教育支援センターは非常に意義のある場所であり、今後も有効に活用し、円滑な運営を目指します。

○高坂委員

ありがとうございました。子どもたちが利用しやすいよう、入り口を複数設けたり、自分のペースで学べるよう柔軟に運用されたりしている様子がよく伝わってきました。各中学校でも、工夫を凝らしながら運営されていることがうかがえます。

本校では、校内教育支援センターの取り組みが今年で3年目を迎え、職員や市の支援員の先生方が様々な工夫を重ねながら支援にあたっています。教室復帰を目指すというよりも、子ども自身が自分の心と向き合い、自分に合った学び方を見つける場として位置づけ、理念に基づいて運営しています。

利用形態は多様で、常時利用する生徒もいれば、教室で過ごす中で一時的に困難を感じた際にセンターを訪れ、オンライン授業を受けた後に教室へ戻る生徒もいます。また、月に1回や半年に1回程度の頻度で継続的に利用する生徒もいます。

支援の在り方を検討する際、常に立ち返るのは「学校が子どもにとってワクワクする場になっているか」「多様な学びが保障されているか」という原点です。校内支援センターや市の支援体制が充実していることはありがたいですが、最終的には学校そのものの在り方を考える必要があります。

また、支援員の配置にも課題があります。本校では市費の支援員が2名、半日ずつ交代で勤務していますが、教員免許を持たない方もおり、運営方法に悩みながら対応しています。校内を「安らげる場所」と「学習する場所」に分けるなど、実情に応じた計画を立てていますが、支援員にとっても研修や他校との交流、視察の機会など、学びの場が必要だと強く感じています。

○荒井座長

ありがとうございました。ここで事務局に確認したいことがあります。先ほど話題に出た「親の相談員」についてですが、市によって対応が異なるように感じます。市の相談員や市民の方が担っている場合もあると思いますが、相談員に求められる資格や経験など、民間での要件や条件に何か基準はあるのでしょうか。先ほどの説明では教員資格は必須ではないとのことでしたが、その点も含めて確認させていただきたいと思います。

○事務局

心の支援課では、校内教育支援センター支援員と子どもと親の相談員の配置を行っていますが、いずれも“支援員”という立場であり、教員免許が必須というわけではありません。要件としては、地域の支援者や地域で活動されている方、あるいは教員免許をお持ちの方など、比較的広い枠で人材を受け入れているのが現状です。

○荒井座長

貴重な情報をいただきましたので、後ほどの議論にも活かしていければと思います。続きまして、信州型フリースクール認証制度の説明、そして今年度実施したフェス、さらには保護者を対象としたイベントの実施について、まずは村上委員からご感想をお願いできますでしょうか。

○村上委員

まず、教育委員会をはじめ、次世代サポート課や信州大学などのご協力がなければ今回の取り組みは実現できませんでした。ビデオメッセージの提供や当日のブース出展など、県の皆様にも大変ご尽力いただき、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

また、校内・校外の教育支援センターの話題がありましたが、こうした行事に関わる立場として、共通する悩みもあると感じています。もし第2回を開催するなら、市民との交流や分科会での意見交換も検討できるのではないかでしょうか。

当日の感想では、「もっと時間が欲しかった」「もっと意見交換したかった」という声が多く、概ね好意的に受け止められたと感じています。ただ、今後すべての要望に応えるのは難しいため、教育委員会や円卓会議、次世代サポートなど関係機関と連携し、行事の役割分担や交通整理を行い、それぞれのイベントを充実させる必要があります。

フェスについては、子どもたちが予想以上に楽しんでくれました。当初は途中で帰りたくなるのではないか、トラブルが起きるのではないかと心配しましたが、最後まで参加し「また来たい」という声も多くありました。今後は、子ども中心のイベントを一つの柱とし、研修や保護者向けイベントを別に設けることで、負担を減らしつつ相乗効果を期待できると考えています。第2回開催を望む声も多くいただいているので、皆様のご意見を伺いながら、より良い形で実現できればと思います。その際には、ぜひまたご協力をお願いいたします。

○荒井座長

ありがとうございました。他に2つ目の柱としまして、次世代サポート課の方から説明がありました認証制度、保護者向けのイベント等について、ご質問やご感想等をいただけたらと思います。いかがでしょうか。では、甘利委員にお願いします。

○甘利委員

まず、このキッカリンフェスや、学校に行かない・行けない子どもたちへの理解を深める保護者の集いについて、本当に素晴らしい取り組みをしてくださったことに、心の底から感動しながら資料を拝見しました。まず何より、「参加したかった」という思いが強く、なぜこの情報を知らなかったのかと、とても悔やんでおります。

私自身、「お母さんが元気になると子どもも自然と元気になる」という思いから、親の会を続けてきました。今回のように、学校に行かない・行けない子どもへの理解を深める保護者が集まる会を主催し、そこに注目してくださった次世代サポート課の皆さんには、本当に良い視点を持っていただいたと感じています。

お母さんたちは「話したい」のです。心に重荷や悩みを抱え、それをどこで出せばいいのか分からぬ。そんな思いを話せる場所は必要です。ただ、こうした会に参加すること自体にも大きなエネルギーが必要で、緊張してしまう方も多いのが現実です。資料にあった「まだもがいていますが、少し楽になれた気がする。子どもの考え方や思っていることを大切にしたいし、笑顔を守りたいと改めてえた」という感想には強く共感しました。

本当に、お母さんたちはどうしていいか分からぬ。でも、少し先を歩いてきた経験者が「大丈夫だよ」と伝えられる機会はとても大切です。もしまだこうした機会があるなら、ぜひ参加したいと心から思っています。感想になりますが、どうぞよろしくお願ひいたします。

○荒井座長

ありがとうございました。情報が届かなかったこと、心からお詫び申し上げます。今回のイベントには約180名の参加がありました。教育関連のイベントでこれだけの人数が集まるのは難しいことかと思います。オンライン開催という形式も関係しているかもしれません、非常に高いニーズがあることを実感しました。なお、第1部は現在アーカイブを公開していますので、ご関心のある方は○事務局までお問い合わせくださいか、ポータルサイトからアクセスしてください。

続きまして、不登校支援機関連携推進員についてです。具体的な働きぶりなどに関して、一番実感されているのは村上委員かと思います。もしご意見があれば、この場でお話しいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○村上委員

本当にこまめに顔を出していただき、ありがとうございます。ざくばらんに本音で話せますし、困っていることも伝えられるので非常に助かっています。人員が補強されたことも心強いで

諒訪圏では、地元行政が懇談の場を多く設けてくださるようになり、負担はありますが、コミュニケーションが取りやすくなっています。そうした場にも積極的に参加していただき、顔を合わせて話せることが、学校にとっても「間に入ってくれる人がいる」という安心感につながっています。前半でも懸念として挙がった、学校と居場所・フリースクールとの関係を柔らかくする意味でも、連携推進員の役割は今後ますます重要になると思います。私たちが直接言うよりも、間に入って総意として伝えてもらえるのは非常に心強いで。また、子どもたちも訪問を楽しみにしていて、「またあのおじちゃんが来た」と歓迎してくれるのもありがたいです。そうした点も含め、今後ともよろしくお願ひいたします。

○荒井座長

ありがとうございます。コミュニケーションの頻度を高めていただき、既存の組織間の関係だけでなく、フリースクールの新規開拓や掘り起こし、さらに子どもと在籍校との新たな関係性の構築までコーディネートしていただいている、全国的にも例のない非常に貴重な役割を担っていただいていると感じています。県内4人体制で取り組んでいただいているとのことで、ご負担もあると思いますが、引き続きよろしくお願ひいたします。

ここからは「意見交換」に入りたいと思います。まず私から論点を提起いたします。

一つ目は、国の「COCOLO プラン」に見られるように、不登校児童生徒に対して居場所や学びの選択肢を増やす取り組みについてです。例えば、行政では「校外教育支援センター」と呼称され、長野県では「中間教室」や「校内フリースクール」という名称も使われていることもあります、課題もあると感じています。

例えば、資料にもありました「入り口を分ける」という記載についてです。誤解を恐れずに言えば、私は固定的な扱いは避けるべきだと思います。国の不登校関連の施策でも「入り口を分けるべき」というある種の規範が提示されることがありますが、大原則として、子どもの意見を尊重するという観点を前提とすべきだと考えています。入りづらさを感じている子に対して環境調整を行っていくことは当然必要ですが、あまりにもこうすべきという「べき論」を振りかざしてしまと、学校の柔らかさや実践の可能性を損なう可能性もあるのではないかと思っています。子どもの心理的安全性を尊重し、選択肢を広げていくことが重要なのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

さらに、フリースクールなど多様な学びを実践する方々との連携も重要です。場づくりを共有するか、あえて異なる雰囲気を持たせるか、コンセプトを統一するかなど、検討の余地があります。

最後に、校内・校外教育支援センターの充実についてです。量的拡充と質的向上の両面で、県への要望や現場の課題をぜひお聞かせください。また、多様な学びを推進し、子どもが安心して過ごせる仕組みづくりと関わって、支援会議のあり方などを含めてご意見をいただければと思います。

まず、教育支援センターで勤務されている小松先生から問題意識をお伺いできますでしょうか。

○小松委員

校内教育支援センターの写真にソファやパズルがあるという話を聞いて、私自身、中学校勤務が長かったこともあります、数年前の状況を思い返すと「居心地が良すぎて教室に戻らなくなるのでは」という声があり、導入が進まなかった現実がありました。そうした中で、今こうした設備が整っているのは、子どもへの理解が進んできた証拠だと感じ、とても嬉しく思います。

言いたいことはたくさんありますが、一つ挙げるなら、人員配置です。1日勤務されている方がい

る学校もあれば、そうでない学校もありますが、やはり1日そこにいて子どもと関われる方がいることは非常に大きな意味があります。私は学校外の立場ですが、フルタイムで関わることで表情や変化を直に感じ取れ、そこから学ぶことがあります。こうした積み重ねが支援の質につながると思います。

個人的に驚いたのは、長野県の校内教育支援センター設置率です。中学校97%、小学校70数%という数字がある一方、文科省のホームページでは59.1%と記載されていました。心の支援課に確認したところ、97%や70数%は学校調査の回答で、保健室を区切ったり空き教室を使ったりして、支援員がいなくても対応している場合も「ある」と回答されているとのこと。一方、文科省の数字は人的配置があるかどうかで集計されているそうです。この違いは、現場で先生方が工夫して対応している証拠でもあります。だからこそ「人を増やしてほしい」という思いが強いです。

もう一つは「研修の場」です。塩尻市では8月頃、指導主事の方から「校内教育支援センター担当職員は、勤務の関係で一堂に会する機会がないので、希望者で集まりませんか」という声かけがあり、私も参加しました。十数名が集まり「こんなに集まるんだ」と驚きました。子どもと直接関わる方々が悩みや他校の取り組みを知りたいという思いで自主的に参加されたのだと思います。意見交換を通じて、こうした会の重要性を改めて感じました。

また、不登校の子どもと直接関わる先生方が学校内で自分の思いや考えを発信する機会が少ないのではないかとも感じます。担任の先生方も多いの子どもを見ている中で、さまざまな考えを持っていると思いますが、生きづらさを抱える子どもと日々向き合う先生方には特有の悩みがあります。そうした声を発する場や、他校やフリースクールの方々と考えを交換する機会を広げることで、校内・校外の教育支援センターのあり方も変わってくるのではないかと強く思います。

○荒井座長

ありがとうございました。続きまして、酒井教育長にご発言をお願いしたいと思います。行政としての役割という観点も含めて、上田市の現状や、教育支援センターの設置のあり方について、現在の状況や抱えている課題などをぜひお話しください。

○酒井委員

私自身が考えていることですが、不登校のお子さんたちに対して、私たちがこれまで何をしてきたかというと、原因を探り出し、その原因に対する対策を考え、対策を講じることで登校できるようにする——といった方法で学校教育を進めてきたように思います。

しかし、実際に不登校のお子さんたちと関わってみると、すべてのケースではありませんが、原因すらはっきりしない、自分でも理由がわからないけれども学校に行けない、そんな苦しさを抱えている子が何人もいました。

そうした子どもたちを見たときに、私たちが“不登校ゼロ”を目指すとか、数の増減に一喜一憂することには、少し違和感を覚えます。むしろ、学校や教育現場がすべきことは、こうした苦しさを抱える子どもたちに対して、すべてを救うことはできなくても、寄り添うような環境を整えてあげることではないかと、私は考えています。

では、こうした“寄り添う環境”とは何なのかということについて、私自身は“時間・空間・人間”という3つの視点で考えていく必要があると思っています。

まず“時間”についてですが、子どもによっては朝に来られる子もいれば、昼、放課後、夜にならないと来られない子もいます。“空間”についても、学校という場所が安心できる子もいれば、教室には入れないけれど相談室なら大丈夫という子もいます。さらに、校内の中でも自由に自分の計画を立てて過ごせるようなフリースクール的な空間が合っている子もいれば、学校という枠組み 자체が苦しいという子には、校外の中間教室が必要かもしれません。さらにその中間教室でも難しい場合には、民間のフリースクールなど、より柔軟な場が必要になることもあるでしょう。

このように、“時間”と“空間”には多様なニーズがあり、それに応じた環境を整えることが大切です。そして、そうした場づくりを進めるためには、教育機関、行政、民間の支援者などが連携していくことが重要だと感じています。

上田市では、しばらく前から校内にフリースクールを設置しています。昨年度の状況ですが、30日以上の欠席者は小学校で25名増、中学校で12名減となっています。90日以上の欠席者については、小学校で33名増、中学校で30名減という結果でした。

この数字から見えてくるのは、以前は学校にまったく、あるいは長期的に通えなかったお子さんたちが、30日以上の欠席にはなるものの、90日以内に収まっているケースが増えているということです。つまり、学校に居場所ができることで、学校という場に足を踏み入れる子どもたちが少しずつ増えてきているのではないかと感じています。

今年度の状況についても、私自身が校長面談をすべて終えた段階で数を確認したところ、現時点で中学校だけでも約70名の子どもたちが校内フリースクールを利用しています。上田市には中学校が11校ありますが、そのうち7校に校内フリースクールが設置されており、そこで70名の子どもたちが登校しているという状況です。

小学校については、上田市内25校のうち2校に校内フリースクール的なものが設置されており、現在6名の児童が参加しています。中学校と比べて設置率が低い理由についてですが、これは“専科の先生がいるかいないか”という点が大きく関係していると感じています。つまり、子どもたちが1日学校に登校した際に、迎え入れてくれて、一緒に計画を立ててくれる先生、教室に行こうか迷っている時にそっと寄り添って後押ししてくれる先生、あるいは気持ちを受け止めてくれる先生がいるかどうか——この“人の存在”が、校内フリースクールの機能や効果に大きく影響しているのではないかと思います。

これが、私が先ほど申し上げた“人間”という3つの視点です。時間・空間・人間という3つの要素が揃ってこそ、子どもたちに寄り添う環境が整うのではないかと考えています。以上が上田市としての現状と私の考えです。

検討方法として、私たちも努力しながら協力していきたいと考えています。いわゆる“寄り添える先生”が校内にいて、校内フリースクール的な場が整ってくれれば、学校にまったく行けないお子さんの苦しさに、より深く寄り添えるのではないかと私は思っています。そうした意味で、上田市では、そうしたお子さんたちの環境を整えられるような取り組みができるかということで、現在、具体的な取り組みを始めているところです。

○荒井座長

長野県は物理的に広いこともあり、場の整備が実態に追いついていない側面もあるのではないかと感じています。私たちはどうしても“数”的な増減に一喜一憂しがちです。しかし、学校現場としては“居場所機能”が一旦整うと、学ばせなければならない、学習に意識を向けさせなければならないというような、ある種の“強迫観念”を抱えてしまうことも少なくありません。こうした空気を子どもたちは非常に敏感に感じ取っているのではないかと思います。結果として、“結局そのためだったのか”と感じてしまう子もいるのではないかと危惧しています。

その点について、成澤委員は学校の中にスタッフとして入っていたご経験もあると伺っています。学校の人間でありながら、学校の人間ではないというような、曖昧なポジションだからこそ果たせる役割もあるのではないかと思います。改めて、関わられていて感じられている役割や課題感などがあれば、ご報告いただければと思います。

○成澤委員

私が実際に小学校の校内教育支援センターに支援員として入らせていただく中で、さまざまな難し

を感じています。先ほども他の方からも話がありましたが、やはり支援員の人手不足は非常に大きな課題だと感じています。

例えば、授業に付き添えば教室に出られる子どももいるのですが、支援員が1人で児童が3~4人いると、付き添いができず、授業に参加できないというケースがあります。付き添いをすると支援室に大人がいなくなってしまうため、どちらも対応できないという状況が生まれてしまい、非常にもつたいないと感じました。

また、支援員同士の交流についても課題があります。教育を専門としてきた方ではない支援員の方も多く、自分の対応が正しいのかどうか悩みを抱えている方が多い印象です。さらに、ほとんどの支援員が一人で勤務しているため、他の曜日に入っている支援員との交流がなく、“これでよかったのか”と毎日不安を感じている方も少なくありません。中には、今後支援員を続けていく自信がないとおっしゃる方もいらっしゃいます。

校内支援委員会についても、支援員の方は勤務時間の都合上、出席できないことが多く、課題感を共有したいという思いがあっても、先生方からは“給与が発生しない時間に出席をお願いするのは申し訳ない”という理由で声をかけづらいという話も聞きました。

最後に、担任の先生方とのお話の中で、“校内教育支援センターに子どもを入れてしまうと、学級に復帰できなくなるのではないか”“あそこに入れてしまったら終わり”と考えている方も一部にいらっしゃるということを伺いました。運営の仕方や位置づけについても、まだまだ難しさがあると感じています。

○荒井座長

ありがとうございます。今のお話を伺って、支援員を取り巻く“安定性”が非常に重要な課題だと改めて感じています。支援員と担任の先生との関係、支援員同士の関係、さらには支援員が学校としての支援会議に参加できるかどうかという点など、それぞれ限られた時間の中で勤務されている中で、情報共有をどう進めていくかは非常に大きな課題だと思います。

この点について、小学校・中学校の現場では、支援員が勤務後にどのようなことを記録として残しているのかについてはいかがでしょうか。

また、校長経験もお持ちの小松委員からもぜひご意見をいただければと思います。まず田中先生から、支援員さんの支援会議への参加の状況などについて、お話しいただけますでしょうか。

○田中委員

お願いした際には早く出てくださいって、その分は勤務の割り振りなども調整していただきました。保護者の方々は、普段接している支援員の先生にも出席してほしいという思いが強く、保護者との会議には一緒に参加していただき、お話を聞いていただきました。

担任の先生の中には、“あそこに入ったらもう復帰できない”という考え方を持つてしまう方もいて、そうではないということを丁寧に話しながら、日々1回は顔を出していただいたり、声をかけていたいたいたりしています。

また、先日成澤さんから“せっかく記録を書いても見てももらえない”というお話がありましたが、私たちの学校でも1人1冊ノートを用意して、支援員の先生がその日の様子を記録し、帰る際に担任の机に置いていくようにしています。担任の先生も連絡事項などを記入し、朝には支援員の先生の机に置いておくという形で、連絡の仕組みを整えています。

支援員同士の交流もあると良いなと感じています。本校の子と親の相談員の方も、いじめ・不登校・南信の会議などに時間外でも参加してくださっており、情報を求めている様子が見受けられます。私も一緒に参加していますが、県への報告にもその点を反映させて記載しました。

本校の支援員は、もともと知り合いだった方にお願いしており、元養護教諭の方ですので、私とも頻繁に話をしています。子どもがホッとできる環境を作ってくださっていて、とてもありがたい存在

です。ただ、悩みも多く抱えていらっしゃるので、オンラインでも良いので支援員同士がつながれる場があると良いなと思っています。私にはざっくばらんに話してくださいますが、校長には言えないこともあるのではないかと感じています。“本当に大変だ”という声を受けて、“じゃあ一緒に考えよう”というスタンスで、教頭先生も交えて何度も話し合いを重ねています。支援員の方々は情報を求めていて、自信をなくしている方もいます。学習についても、私はあまり強く言いませんが、保護者の方々から“やってほしい”という声が強く、不安を抱えている様子が見受けられます。子と親の相談員の方も、“なんとかしなきゃ”という思いで関わってくださっているのだと感じています。

○高坂委員

本校でも、毎時間の生徒の様子を支援員の先生方がファイルに記録したり、場合によっては子どもたち自身が計画を立てて振り返りを行ったり、それを担任が確認するような取り組みをしています。担任も毎日顔を見に行ったり、時には授業を教えたりするなど、関わりを持つようにしています。

ただ、先ほども少し話が出ましたが、支援員の方々はそれぞれ一生懸命に生徒に向き合ってくださっている一方で、アプローチの仕方が異なるため、子どもによっては“この支援員さんは合うけれど、あの先生はちょっと苦手”ということがどうしても出てきます。これは教職員でも同様ですが、だからこそ“何を大事にするか”という視点を校内で共有し、生徒自身に過ごし方を選ばせることを大切にしながら、伴走していくこうという方針を確認しています。

また、不登校は“問題行動”ではなく、子どもたちが今ここでこういう学び方をしているということを、引け目に感じたり、自分を卑下したりすることのないようにと願っています。隣の小学校では、塩尻市のコミュニティスクールの取り組みとして、コーディネーターの先生が水曜日の休み時間に小学校へ行き、学校運営委員会の先生方と一緒に不登校の子どもたちや中間教室の子どもたちと遊ぶ時間を設けています。

本校でも昨年、校内支援センターでソファに寝転がって言葉もなかなか出なかった生徒が、地域の方々と出会い、自分の好きなことを見つけて、地域とつながることで変化が見られました。子どもたちがそれぞれの“好き”を見つけられるような環境づくりに、何か可能性があるのではないかと、考えているところです。

○小松委員

これだけ多様な学びの場ができてきた今、学校とフリースクールなどの“つながり”が非常に重要なになってきていると感じています。先ほど、南信教育事務所の袖山先生が教頭会に参加され、教頭先生方に報告されたというお話がありました。今はや不登校は学校だけが抱える課題ではなくなっています。コミュニティスクールの話にもありましたように、地域のさまざまな方が関わりながら、子どもたちの成長を見守っていくことが大切だと思います。

ただ、子どもたちは学校に在籍しているわけですから、学校の先生方には預けたという感覚ではなく、共にどう関わっていくかを考えながら、子どもたちの成長を支えていってほしいと思っています。そのためにも、地域の力を学校が借りるという視点と、学校が責任を持って関わり続けるという姿勢の両方が必要です。

こうした連携をうまくコーディネートする人の存在が、非常に重要だと感じています。塩尻市でもフリースクールがいくつか立ち上がっており、教頭会にフリースクールの代表の方々をお招きして、それぞれの取り組みについて説明していただきました。実際に代表の方々の話を聞くことで、子どもへの接し方や理解の仕方など、学校側にも新たな気づきが生まれます。

学校はともすれば閉ざされた世界になりがちですが、こうした外部との接点を持つことで、教頭先生方多くのことを感じ取ってくださっています。塩尻市には、eスポーツを活用した不登校支援の場もあり、管理職の先生方に見学していただいたこともあります。実際に子どもの姿を見ることで、

感じることが多くあるようです。ですので、学校と多様な学びの場との“出会い”をどう設計していくか、そのコーディネートの在り方が今後ますます重要になってくると思います。学校がすべてを抱えるのではなく、地域の力を借りながらも、子どもたちを“預けた”のではなく、“在籍する子ども”として、どう成長を見守っていくかを考える——そうした連携が進んでいくことを願っています。

○荒井座長

ありがとうございました。様々なご意見をいただきましたが、県の事務局の方で、今いただいたご意見を踏まえて、何か策があれば周知していただけますか。

○事務局

今、皆様方から多様な実態をご紹介いただきました。最初に心の支援課の方で各学校を訪問する中で、支援員の先生方ともじっくりとお話を機会をいただきました。その中で、皆さんおっしゃっていたように、他の事例について知りたいという声が非常に多く寄せられているところです。

これまでも好事例については『はばたき』の中で紹介してきましたが、スピード感という点ではまだ課題があると感じています。研修に関しては、先ほど田中先生から南信教育事務所の会議への参加について紹介がありました。現在も報酬は出ないものの、自主的な研修として、心の支援課から各教育事務所主催の不登校支援に関する会議を周知しており、参加していただいている例もあります。また、荒井先生からもご指摘がありましたように、支援の時間を削って研修に参加する形では、支援員の先生方にご負担をかけることになりますので、参加可能な形で、より良い研修内容について検討してまいりたいと考えています。

一点、話を戻しますが、良い取り組み、校内教育支援センターだけでなく、フリースクールなどの支援の取り組み状況については、年度末に学校に直接届く形で周知できるような方法も考えられるのではないかと思っているところです。

○荒井座長

ありがとうございました。残りの時間を使って、2つ目の論点について議論できればと思います。2つ目は、校内・校外を問わず、連携についてです。例えば、村上委員から諏訪地域での取り組みについて前回ご紹介いただいた部分がありましたが、改めてご紹介いただけますか。いかがでしょうか。

○村上委員

諏訪地域の6市町村は、子どもたちの通学圏としても適した規模で、見守りの連携にも非常に向っています。諏訪市を中心に、岡谷市、下諏訪町、茅野市を中心に、原村や富士見町などにも声をかけ、地域ごとに活動しています。両方の地域に関わりたい方は、どちらにも自由に参加できます。

行政や学校関係者にも参加していただき、民間の方々も忙しい中でできる範囲で協力してくださっています。各地域の会では、事例紹介や困りごとの共有、先生方からの相談、学校側への要望などを話し合っています。こうした会は年間3回程度、2か月に1回のペースで開催され、月に1回どこかで開かれることもあります。

さらに、毎年1回、諏訪6市町村が一緒になって官民連携のリアルイベントを開催しています。今年も11月に予定されており、保護者の方々にも多く参加いただき、交流を深める場になっています。問題はいろいろありますが、やはり直接会って顔を知っていることが大切です。揉め事は避けられませんが、こじれる前に早めに話せる関係をつくっておくことが重要です。諏訪地域では、そうした関係性がだいぶできてきたと感じています。揉め事を避けるのではなく、早めにコミュニケーションを取り、こじらせないことがポイントです。健康管理に似ていますが、本当に大事なことだと思います。

今日改めて感じたのは、校内支援センターや校内フリースクールとの距離が近くなってきたことです。人員不足や対応の限界について、公の立場の方が話してくださるようになったのは、フリースクールの大変さを学校側が理解し始めている証だと思います。学校とフリースクールの間に“グラデーション”ができてきたことは、とてもありがたいことです。

今後の課題は、思いのある人たちは制約の中でも自腹で研修や交流会に参加してくれていますが、一方で「自分は関係ない」と思っている人たちもいることです。そうした人たちにこの取り組みをどう理解してもらうかが次の大きな課題です。玄関の分け方の話もそうですが、これは当事者だけの問題ではありません。普通に通っている子どもたちや先生方がどう感じているのか、その視点も大切です。「自分には関係ない」と思っている人たちにこそ、現状を知ってもらうことが、連携を進めるうえで欠かせません。

また、「教室に戻れる・戻れない」という話を聞くと、校内の居場所のあり方を思い出します。行き来ができている学校は、教室と校内フリースクールの関係性がうまくいっているところです。その理由は、教室の子どもたちが行き来を“当たり前”として受け止めているからです。「おかえり」「行ってらっしゃい」と自然に声をかけ合える雰囲気があり、先生も特別扱いせず、同じ仲間として接しているからこそ、行き来が可能になります。

逆に、「戻ってこないのでは」と不安になる先生は、そうした空気がまだできていないことに気づいているからこそ、無理に戻そうとする対応につながってしまうのだと思います。無理に戻そうとする空気は、不登校の子どもや保護者をさらに追い詰めます。だからこそ、保護者も含めた「被当事者」に対して、「いろんな場所で学ぶことが当たり前」という認識を広めることが重要です。

たとえば、PTA講話や入学後の早い段階で、すべての保護者に話を聞いてもらう機会を設けることが必要です。最近、不登校になったお子さんのお母さんから「もっと早く知っていれば、子どもを追い詰めずに済んだかもしれない」と話していただきました。だからこそ、今は「自分には関係ない」と思っている保護者や先生方にこそ、この話を知ってほしいと強く感じています。当事者や運営者の連携に目が向きがちですが、それと並行して広く啓発していくことが次のステップだと思います。

○荒井座長

不登校自体は問題ではないという前提でお話ししますが、リスクコミュニケーションの考え方と通じる部分があると思います。たとえば、教員の働き方改革でも、所定の勤務時間を事前に明示し、新学期の時点が多くの方が理解しているかどうかで、その後のトラブルの程度が変わります。

同様に、すべての子どもが不登校になる可能性があるという前提に立てば、学校や行政には、様々な学びの場を紹介・提供する責務があるはずです。こうした支えを充実させていかないと、結果として過剰適応のリスクも高まると考えています。

松本市では、ここ数年「不登校支援関係者懇談会」を、オープンな場として年数回開催しています。教育長や教育委員会事務局、校外教育支援センター、フリースクール関係者、保護者、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどが自由参加で集まり、毎回テーマを設定して話し合っています。たとえば、ある回では校外教育支援センターの「困り感」をテーマに、次回はスクールソーシャルワーカーの視点から不登校の現状を共有するなど、同じ現象を異なる立場から捉えるなど、意見交換を続けています。

こうした取り組みを通じて、課題の所在がほぼ共通となっていることがわかります。第一に、子どもの多様化する実態に対して支援する人手が物理的に不足していること。第二に、ニーズに応じた多様なサービス提供に限界があること。第三に、支援者が他業務を抱える中で、集合して話し合うこと自体が難しいことなどです。予算を倍増できない現実を踏まえると、多機関・多職種間の連携が不可欠だと考えます。

国の施策も含め、公設民営型の校内フリースクールや校外教育支援センターとの民間協働の事例もあります。例えば、週の半分だけフリースクールのスタッフに来てもらうなど、仕組みづくりは可能です。ただし、資金の流れや支援者の身分・待遇など、慎重な検討は必要ですが、施策としての可能性は十分あると感じています。

ここから「どうやって支援者間の連携をつくるか」という議論に移りたいと思います。前回、小松委員から支援会議について触れられましたが、現状では学校主催で、学校が選んだ関係者に勤務時間

後に集まつてもらう形が多いのでしょうか。小松委員はどうに感じておられますか。

○小松委員

支援会議は非常に重要だと感じています。前回、多様な学びの場で学ぶ子どもたちの支援会議について、本来は学校がコーディネートするのですが、私の所属する教育支援センターでコーディネートする試みを行ったことをお話ししました。実際に数人のお子さんについて実施しました。

会議が長くならないよう、スクールソーシャルワーカーに協力いただき、「ホワイトボードミーティング」という形式で進めています。子どもの短期目標などをホワイトボードに書き出し、それを写真に撮って保護者と共有します。なるべく1時間以内で終えることを目標にしています。

ただ、学校現場は非常に忙しく、頻繁に支援会議を開くのは難しいのが現状です。お願いする際には、私自身もかなり気を使っています。また、フリースクールに多く通っている子どもの支援会議が学校で開かれたにもかかわらず、フリースクール側が呼ばれていないケースもあり、その際は「ぜひ呼んでください」とお願いしています。

保護者にも参加していただき、「やってよかった」と思える会議にしたいと考えています。うまくいかないと「支援会議ってこんなものか」と思われてしまうので、「できないこと」ではなく「できたこと」「成長が見られたこと」を話題にし、保護者が笑顔で帰れる場を目指しています。

スクールソーシャルワーカーと協力して行った会議では、ホワイトボードの内容を写真に撮って共有しようとした際、保護者から「写真撮ってもいいですか?」と声をかけられたこともあります。中学生になると、過去の経験から「こういう支援会議ならよかった」という声をいただくこともあります。支援会議の中身、つまり保護者に寄り添えるかどうかを大切にしながら、忙しい学校現場でもこうした取り組みを続けていければと思っています。

○荒井座長

支援会議について、心の支援課から、どのようなマニュアルや手引きがあるのか、ご紹介いただきたいと思います。というのも、フリースクール等の関係者から、支援会議に対する「不信」があるという話を耳にすることがあり、うまく機能していないケースもあるようです。

先ほど小松委員からもお話がありましたが、支援会議が前向きなフィードバックを含んだ場として機能することで、関係者が納得感を持って関われるようになると思います。その点について、心の支援課としての考え方や、支援会議の運営に関するマニュアル等があれば、ぜひご紹介いただけますでしょうか。

○事務局

支援会議について、具体的に提示しているようなもの特にありませんが、心の支援課では不登校支援の対応に関する手引きを作成しており、その中で「このような方法があります」といったモデルを示しております。ただし、児童生徒や家庭の状況はそれぞれ異なりますので、「どの形が最適か」ということを一つに定めるのは難しいと感じております。実際のところは、各学校や教育委員会等において、それぞれの状況に応じて個別に対応していただいているのが現状であると認識しております。

不登校の手引きに関しては毎年改訂をしております。様々なその時の状況のトピック等を入れ込みながら、各学校に実践、好事例等を交えながら示しているものであります。ホームページの方に掲載がしております。また、年度当初、各学校に周知はしているところであります。

○荒井座長

毎年改定していただいて大変かと思いますが、またぜひ皆さんもご覧いただけたらなと思います。その他、仕組みづくりという点で何かご意見等あればいかがでしょうか。

○近藤委員

教育委員という立場で長くやっていますが、だんだん、いろいろな機関が連携できるようになってきていると感じています。今後、これをどこまで広げていくかというのは、その配置のことも含めて非常に難しい課題だと思います。

この間も、県の公民館大会で、公民館の方が子どもの講座を作るという取り組みがありました。以前は「学校に公民館の方に来ていただきたい」という形でしたが、これからは子どもたちも学校から解放して、垣根を少なくし、地域の方と一緒に学んだり、深めたりできればと感じています。

また、現在は支援会議の数が非常に多いです。不登校に関するだけでなく、さまざまな点でいろいろな支援会議が毎日学校で行われています。それをどう整備していくのか、整備できるのかと考えています。仕組みづくりを検討する際には、不登校のことも含めて、最近は発達障害のお子さんが増えてきていますので、特別支援関係の問題との関連も含めて考える必要があります。

○荒井座長

今回の切り口は「不登校」ですが、やはりお子さんに対する支援が非常に重要な課題だと感じています。この点については、特別支援教育のセクションとの情報共有や連携が、支援会という形でつながる可能性もあるのではないかと思う。

支援会議という場づくり自体は共通していますが、扱う内容は多様で、それぞれの子どもが抱える課題には共通する行動的な側面もあるように思います。各学校では様々な形で支援会が設けられており、登校支援に関するものもあれば、特別支援に関わるものもあります。その子のニーズや状況に応じて、支援会のメンバーも流動的に構成され、柔軟に運営されている印象です。関係機関が参加するケースもあり、支援の幅が広がる一方で、現場が多忙であるがゆえに、情報がオープンになりにくいういう課題もあるかと思います。それでも、子どものニーズに応じて、様々な形で支援が行われているという点は、非常に意義深いと感じています。

時間となりましたので、本日は終了とさせていただきます。本日の議論では、公教育のクッションの厚みをどう合わせていくかという点について、皆さんとともに考えを深めることができたのではないかと思います。引き続き、皆さんにお持ちの情報を共有し合いながら、今回のように資料を通じて情報発信をしていただけることを期待しています。

本日の内容についても、ぜひ取りまとめていただき、次回に向けた議論の土台として活用していただければと思います。